

おくびのほり 尾頸之堀

宮島棧橋広場の正面に見える小高い岡（標高 27m）が、弘治元年（1555）10月1日、毛利元就が陶晴賢を破った厳島合戦の古戦場・要害山です。要害山は、現在は宮尾城跡と呼ばれていますが、「宮尾城」という呼び方は江戸時代以降のもので、合戦当時の古文書には「宮之城」とか「宮要害」として登場します。「宮」＝宮島にある城（要害）という意味です。

さて、この城は、一般には毛利元就が陶晴賢を厳島におびき寄せるために築いた囀（おとり）の城と説明されていますが、実際には宮島の港と町（有の浦）を守るための城として、厳島合戦の数十年前から存在していました。天文 23 年（1554）5 月 12 日に宮島を占領した毛利元就は、自ら普請のため宮島に渡海したといえますから、相当大規模な改修を加えたと考えられます。

要害山は、現在はその周囲が埋め立てられていますが、合戦当時は海に突き出した岬の先端のような地形でした。三方は急斜面で海に落ち込み、北東だけが尾根続きとなっていました。中世では尾根筋が一番狭くなった場所を「尾頸^{おくび}」と呼びます（城がある尾根の先端は「尾崎」です。）「尾頸」は城をめぐる攻防の焦点となるため、毛利方はここに空堀を設けて敵の侵入を防ごうとしました。

棧橋広場から町屋通り方面に向かうには「みなと隧道」を通りますが、トンネル入口の 10m ほど手前で、右側の細い坂道を登ってみてください。その先に、両手を広げると指先が届きそうな、狭い切通しがあります。これが宮之城の「尾頸之堀」の跡です。正確に言うと、合戦当時の堀は時間の経過とともに埋まってしまい、後世になって、宮島の住民の通路として再び掘削されたのが現在の切通しです。



要害山 尾頸之堀

厳島合戦直前の 9 月 27 日、毛利元就は小早川隆景に当てた書状で、「宮之城」の「尾頸之堀」が陶方によってほとんど埋められてしまい、城衆が弱っていると伝えています（小早川家文書 531 号）。この狭い「尾頸之堀」は、文字通り「宮之城」の生命線であり、さらに言えば、毛利元就と陶晴賢の決戦の行方を左右する重要な場所だったのでした。

（秋山 伸隆）

（「宮島学センター通信」第 8 号・2017 年 3 月）